

【被災地東北は今・・・】 岩手県綾里・コタニ 地域で再開できた工場は50%。しかし弊社工場は皆 様のおかげで震災前の生産に回復できました！

■常総生協組合員の皆様へ

(有)コタニ 代表取締役 小谷幸治

三陸の海と沿岸の状況は、一昨年の東日本大震災で大きく様変わりしてしまいました。被災した沿岸の工場も少しずつ再開しておりますが、まだまだ震災前には戻っていません。現在のところ、再開できた工場は約50%です。それでも本格的に生産が再開できた工場は少なく、まだ時間のかかる状況に変わりありません。

しかし、弊社工場は、皆様からの支援もあり、2011年9月より一部の製造を再開し、昨年6月には目標にしていた復旧がすべて終了しました。なんと今では震災前の製造と同じ量、同じ商品の製造ができるまでに回復しました。これも皆様の温かい支援の賜と深く感謝申し上げます。

さて、「岩手産わかめ」の状況ですが、震災の年はこれまで国産の7割を占めていた三陸産養殖わかめは、ほとんど市場に出ることなく終わり、わずかに残された天然わかめのみ出荷でした。

昨年は、養殖施設の瓦礫撤去後、新たな施設が震災前の55%まで設置され、また収穫も過去8年平均の約61%まで回復されました。しかし販売においては原料不足で約2倍近くでの買い付け価格となっており、組合員様にご迷惑をおかけしました。

今年、現在では10日遅れの「早掘りわかめ」の収穫が終わり、いよいよ本格収穫に入ろうとしているところです。これから大きなシケがなく、海水温や病害虫の影響がなければ、平年並みの収穫が見込める状況になってきました。岩手県の入札会は3月中旬からとなりますが、3年目の今年は安定した価格での原料の買い付けができそうです。

しかしながら、販売においては福島第一原発による放射能の風評は先の見えない問題となっています。弊社は、いち早く常総生協の協力を頂いて検査体制を整えられ、昨年は震災前の原料と昨年収穫の原料、さ

らに九州天草産の原料を生協のゲルマニウム半導体で比較検査までしていただき、いずれも不検出で安心できました。岩手県漁連でも早穫りから最終刈りまでの検査をおこなって、すべて「検出せず」となり、安全宣言書も発行されてその資料ももとにして販売をすすめています。

その結果、小売りや業務用卸（外食・学校給食）では、東北・関東地区では徐々に取り扱って頂ける状況になってきましたが、東海・中京・関西・四国・中国・九州地区においては依然として販売は厳しい状況です。

量販店では単品商品については徐々に東北・関東の商品販売が再開されていますが、加工品においては多くが「東北・関東の原料は使用しないこと」が条件となっています。この点は一企業での打開は難しく、県にも話しをしていますが、なかなか進んでいる様子は伺われません。

沿岸工場の悩みのもうひとつは、人員確保の困難です。その原因のひとつは、ほとんどの工場が津波の被害を受けた場所で修繕再開しているために、また津波が来た時のことを考えて、安心して仕事に就けない状況があることです。

また、家を失い仮設住宅で暮らしている方々も、今年には期限が来て出ていかなければならず、不安をかかえたままです。

幸い弊社では、震災前からの従業員で加工を再開することができました。

需要が戻り、仕事量が増え、地域での避難訓練を含めて、少しでも安心して仕事を続けられるような整備が震災地全域の復興につながると思っております。

間もなく震災から2年がたとうとしております。新しい加工品の新商品も製造し、工場の活性化を図って参りたいと考えております。どうか今後とも変わらぬご愛顧いただけます様、宜しくお願ひ申し上げます。

平成 25 年 2 月 25 日



コタニ海藻セット

20



幼わかめ

116



カットわかめ

118



工場従業員のみなさん

★今週のカatalogは震災2年復興特集です。
コタニさんの商品は、表紙および5ページで
特集しています。よろしくお願ひします。

【ものづくり 人づくり 地域づくり】

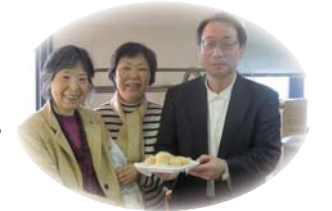
【特集】東日本大震災から2年 東北と私たち (2)

共に生きるということ の意味

宮城県石巻 高橋徳治商店

2011年はわたしたちにとって何だったのか？ この2年、わたしたちは何に気づき、何ができたのか

震災。そしてその後の2年の社会の対応、人々のありよう。一瞬にして弱者になった人たちを前に、容易に言葉が出てこなくなる時。今まで何だったのか。その後に起きた、国や人々のありようは何だったのか。今起きていることはいったい何なのか・・・問い直して、反省し。本性が現れただけなのか。比してわたしたちは変わったのか。それまでの生き方、考え方、価値観は大きく揺らいだ、はずだった。2年の歳月に、再びもとに戻されていく自分に気付く時。



2/23 訪問 おとうふあげを手に

同時代を生きた3.11。そしてそれぞれの3.11。重なりあい、連なり。三工場全壊の中で、1ラインから再開し、届けられる「食べ物」。わたしたちはいのちを育む食べ物でつながり、支え合い、忘れない。人々のつながりと希望を、この小さな”おとうふあげ”のやさしさの中に触れる。伝わってくるよ、高橋さん。ありがとう。



高橋さんの
”おとうふあげ”は
何を私たちに語りかけているのか

19

放射能から子どもを守ろう関東ネットが発足。常総生協も参加しています。今週、ご案内と署名用紙入っています。
「放射能被ばくから子どもを守るための対策を求める請願署名」のお願い(衆参両院二枚あり)

【被災地東北は今・・・】石巻・高橋徳治商店

3.11は終わっていない でもわたしには仲間がいる

原点を見つめ続け、自らの立ち位置を明確にした、丁寧な生き方を、と新工場に賭けます

2012年12月1日。フクシマで高橋英雄さんと一夜を共にした。2011年4月に工場をおそった津波が運んだヘドロの掻き出しの手伝いに伺って以来の二人ぼっちだった。

「大石さ～ん！水出して～！」「OK～！おお通った通った！」電気のつかない暗い工場の中で、川から汲み上げてきたタンクの水をディーゼルポンプで長～いホースで送り出す。工場の水路に厚く溜まったヘドロを高橋さんが水圧で掻き出す。

夕暮れ、満ち潮で工場の前の道路が冠水する中を、ひとり高橋さんを残して宿泊所に工場を去る時、ぼつりこの工場に残された高橋さんの心境を思う。なんと心細いだろうか。それでも高橋さんには、離れがたい愛着と思いがこの工場にあること、痛いほど感じる。

寄り添うということは、テキパキ片付けをすることではなく、ただ傍にいていいことも学ばせて頂いた。

自宅から運び出された、ヘドロをかぶろうが捨てがたかったであろう家財道具を、高橋さんが手にとる暇もなく重機でさらってしまった自分を恥じた。

「ガレキ」とは、一人一人の生の証、ここで暮らした証なんだと気付く。津波一わずか1時間ほどの間の一瞬のできごと。そして外から来て撤去も解体も効率よくやるのが、ぼう然とする心の傷を与えてしまうことも知った。

明かりを消したホテルの部屋で、私は先に休ませてもらい、高橋さんは隣のベッドの淵で携帯にその日の日記を打ち込んでいた。一日一日を忘れないために日記をつけているとのこと。

1ヶ月前、石巻港のすぐ前にあった第二工場の解体、そして自宅の解体があったばかりだ。高橋さんは日記の一部をブログにしていた。

「思い出の工場がいつも簡単に解体されていく光景に立ち尽くした」

と記されていた。明かりを消した部屋で日記をつける高橋さんに言葉はかけられなかった。ペットボトルのお茶だけを置かせて頂いた。

2012年11月の高橋さんのブログの一部を引用させていただきます。

「解体・・・1年7ヶ月以上なるのに、市内の当地エリア解体はまだ半分以下です。10月末で、海から数百メートルの第二工場の解体が終わりました。長男をおぶって、関西の大手メーカーのさつま揚げや笹かまぼこを作っていた30年前の這いつくばるような下請け時代の思い出の工場です。無添加練り物を20数人スタッフ全員、万歳して初出荷した工場でもあります。

立ち会った息子たちと、いとも簡単に解体されていく光景にしばし立ち尽くしてました。11月からは、皆さんが人形やらを洗ってくれた自宅の解体です。せめてもの思い出にと、柱を取り置いてもらうよう解体業者に頼みました。

思い出や悲しさとは何でしょうか？ふるさとは？なんて考えます。大雨が降れば浸水し、変わってしまった光景の中で日々仕事をし、近くの仮の住まいに帰る。言葉にならない何かを受けていて疲れがべったりと心に貼りついていることにふと気がきます。

道路から海の方に目をやれば、数百メートルにピラミッドのような分別瓦礫の山。毎日膨れあがる魔物です。市内の瓦礫は420万トン。二割も処理されていないと言われてます。

被害総額25億円を超える私共の事業。補助金以外の新工場の自己負担は8億円。震災前の借入が5億円。

会社を閉じるのも選択肢だった。随分考えました。考えているうちに、支援に来てくれた皆さんを恨んだりした。復旧支援は我々を裸で寒風吹き荒ぶ廃地に立たせただけ・・・ゴメンナサイ。そんな失礼なと思いつつ、不信感が心の深くに入り込んだ時もありました。

いくら頭を下げてみても足りないが、今は素っ裸。借入担保さえ、価値のない荒地があるだけ。津波で亡くなった人は行方不明含めて石巻圏で6000人。首を吊り自殺した三人の知人友人。生き残ったのは偶然・・・そんな中、遠くから毎日ヘドロや瓦礫の中の機械や工場片付けに来てくれた皆さん、そして避難所の人たちからあてにされた、それだけが私の支えだった。死を選ばないで良かったと、今は言える。

そして震災前を超える、原点を見つめ続け、自らの立ち位置をより明確にした、丁寧な生き方を、と新工場に賭けている。

今は、それぞれの3.11を持つ仲間がいると信じている。信じるに足る私共でありたいと。」

あのガレキとヘドロに埋め尽くされた工場から、1ラインを復旧して、再開された「おとうふあげ」。口に入れて、密かに涙した。

小さなやさしい味の中に、高橋社長をはじめ社員のさまざまな苦勞と思いが込められて、今ここにあり、おいしい～と味わえることの意味。

多くの人々の、そしてわたしたちの共有のかけがえのないもの。高橋さんを支えたのではなくて、わたしたちが支えられ、希望を頂いた。

身体と心をつくる食でつながり、感謝しあい、

支え合ってゆけるすべをわたしたち協同組合は知る。

困難な中でなお、他者を思いやる高橋さんがいる。東海第2原発訴訟の原告にもなって下さった。

「地獄を見聞きし体験したのは私だけではありません。そして未だ放射能に苦しんでいる福島・宮城と関東のホットスポットの人達。私達は自分を変え皆さんと交流してより強い繋がりをもちたいと思います。

生協は信頼にたるところかどうかは皆さん次第です。皆さんの食を任せてモノ作りをしてもらう生産者なんてすから。信頼は本当に作るものです、皆さんと作りましょう。」

おとうふあげの希望の1ラインが新しい工場へつながる。今年7月、小高い丘で高橋徳治商店新工場がスタートします。(2013年3月 大石記)

【2/23 高橋さんを訪ねました】藤田健

2月23日、神奈川のやまゆり生協さんといっしょに、村井理事長、高橋理事、寺田、わたし藤田で高橋徳治商店に伺いました。



震災直後の泥さらい以来、約2年ぶりです。泥だらけだった工場内はすっかりきれいになっていました。

この場所はまさしくあの暗闇の中でヘドロをすくった場所。先が見えない真暗の中、取っても取っても全く無ならず、あの時は絶望感しか感じられませんでした。思わず「あの暗闇の先はこんな感じだったんだ」とうれしくなった瞬間でした。

半年ぶりに会った高橋社長は気持ち顔がふっくらとしていて、ホッとしたのも束の間、今の様子を聞き、愕然としました。

高橋社長は、「確かに瓦礫は減ったかもしれないが、ただそれだけ。復興どころか、逆に後退しているよ」。現在も32万人の人が仮設住宅で暮らしていて、原発の事故から12万人が避難している。行き場がないのに、来年には仮設住宅から追い出される。一体どこに住めというのだ。この工場の回りも誰も住んでいないのに、解体作業もされないままの家がたくさん残っている。全然追いついていない。

私の身内びいきなのかもしれませんが、今の世間に対するの怒りを話す高橋社長も常総生協の話になると、顔がほころんだように見えます。震災後、会うごとに高橋

社長は言ってくれます。「常総生協への感謝の気持ちは忘れない」。避難所で食べ物もなく、ふと野菜が食べたいと言ったら、常総の柿崎さんがトラック一杯に魚住さんから茨城の有機農家のみなさんが提供してくれた野菜を積んでやって来た。地震直後で道も封鎖されているのに。本当に信じられなかったし、うれしかった。あれは忘れられないと言う。

そんな社長が今回思わずもらした話がありました。「柿崎さんには言ったかなあ…。野菜を届けてもらった数日後、避難所のある高台の崖下に野菜が捨ててあるのを見つけてしまった。すぐさま避難所に戻り、誰がやったんだと怒鳴りつけた。震災後、我々のことを心配して飛んできてくれた常総の、柿崎さんや有機の生産者の気持ちを踏みにじる行為が許せなかった。

しばらくして若いお母さん達が泣きながら社長に謝って来たそうです(放射能の心配があって思わずやってしまったと)。「今だから言うけどね。」

最後に現在、建設中の新工場に案内してもらって今回の訪問は終了となりました。7月に完成予定の新工場は太陽光発電を導入し、大震災で露わになった原発問題について環境や生命を脅かすような電気を使わない実践をするという高橋社長の決意でもある。



新工場の外観